

## ココロの学校 企画講演実施要項（案）

- 演 題 「懸命に生きる人々～日本人こそ学んで欲しい～」
- 日 程 2016年7月21日（木）
- 場 所 大阪国際学園 奥田メモリアルホール
- 講 師 NPO アジア・チャイルドサポート 池間哲郎 氏
- 時 程 10:50 開場（生徒：高2，3学年・移動、着席→10:55までに点呼完了）  
11:00 諸注意・校長挨拶  
講演「懸命に生きる人々～日本人にこそ学んで欲しい～」  
（質疑応答）  
12:30 校長挨拶 終了 ⇒ 生徒移動  
※各クラス教室にて感想文を記入

### 【講師プロフィール】

#### 池間哲郎

1954年 沖縄県生まれ。幼少期は沖縄本島北部の自然豊かな本部町で過ごす。中学に上がる直前にコザ市（現沖縄市）へ転居し、米軍統治下時代、米兵の闊歩する基地の街で多感な青年期を過ごす。サラリーマンを経て29歳の時に映像制作会社を設立。その一方、1987年から10年以上にわたり個人的にアジア各国のスラム街やゴミ捨て場等貧困地域の撮影、調査、支援事業を手掛け、1999年任意団体を設立し2002年にNPOの認可を受け、現在まで経営者、カメラマン並びに当団体の代表理事を務めている。2900回を超える全国の講演会では、自らの映像を駆使し、アジア途上国の貧困地域に生きる人々の姿を通して、一生懸命に生きることの大切さ・感謝の心・命の尊さを伝えている。2007年に東京事務所開設、2011年一般社団法人アジア支援機構を発足。2012年8月より、日本の素晴らしさと日本人の誇りをテーマに若者達と共に学ぶ「日本塾」を開校、現在に到る。

#### <職業・役職>

一般社団法人 アジア支援機構 代表理事、NPO アジアチャイルドサポート代表理事  
JAN（日本アジアネット）代表者 カメラマン、沖縄大学非常勤講師、「日本塾」塾長

#### <受賞歴>

2001年12月 西日本銀行 国際財団アジア貢献賞  
2005年3月 文部科学大臣奨励賞  
2009年5月 カンボジア王国より受勲（モニサールポーンマハーセレイワット勲章）  
2011年3月 Yonaoshi ボランティア『赤いかお』下町平和賞（東京都）  
他、沖縄タイムス国際賞、琉球新報社会活動賞、地球倫理推進賞等

#### <主な講演先>

県・市町村の教育委員会、教育関係者、教職員研修、厚生省シンポジウム、医師会、経済団体、PTA・PTA 連合会、社会福祉協議会、福祉団体、国際協力団体、市民の集い、青少年健全育成団体、保育団体、民間企業（基調講演・社員研修）、小・中・高校、専門学校・大学など  
（H26年6月で講演件数は2900回超）

<著作>

「日本はなぜアジアの国々から愛されるのか」育鵬社

「懸命に生きる子どもたち」講演録

「あなたの夢はなんですか。私の夢は大人になるまで生きることです」致知出版

「最も大切なボランティアは、自分自身が一生懸命に生きること」現代書林

「アジアの子どもたちに学ぶ30のお話」リサーチ出版

## ココロの学校 企画講演実施要項（案）

- 演 題 「ホームレス状態を生み出さない日本の社会を目指して」（仮題）
- 日 程 2016年7月26日（火）
- 場 所 大阪国際学園 奥田メモリアルホール もしくは 大学教室
- 講 師 NPO法人 Homedoor 代表 川口加奈 氏
- 時 程 10:50 開場（生徒：高1、中学全学年移動、着席→10:55までに点呼完了）  
11:00 諸注意・校長挨拶  
講演「ホームレス状態を生み出さない日本の社会を目指して」  
（質疑応答）  
12:30 校長挨拶 終了 ⇒ 生徒移動  
※各クラス教室もしくは、会場にて感想文を記入

### 【講師プロフィール】

#### 川口加奈

14歳でホームレス問題に出会い、ホームレス襲撃事件の根絶をめざし、炊出しや100人ワークショップなどの活動を開始。19歳でHomedoorを設立し、シェアサイクルHUBchari事業等でホームレスの人や生活保護受給者累計130名以上に就労支援を提供する。ウーマン・オブ・ザ・イヤー2013若手リーダー部門やGoogleインパクトチャレンジグランプリにも選出される。テレビ、ラジオ、雑誌にも多数取り上げられる。現在、24歳。大阪市立大学卒業。1991年大阪府高石市生まれ。

#### <職業・役職>

NPO法人 Homedoor 代表

#### <受賞歴>

- 【2011年】大学生 OF THE YEAR 2011 初代「グランプリ」、立命館大ベンチャーコンテスト「野村イノベーション賞」、キャンパスベンチャーグランプリ関西大会「最優秀賞」、アメリカン エキスプレス リーダーシップ「敢闘賞」
- 【2012年】社会起業家ビジネスプランコンペ edge2012 「最優秀賞」、キャンパスベンチャーグランプリ全国大会、「ビジネス部門大賞」「経済産業大臣賞」、アメリカンエキスプレス リーダーシップ 「銀賞」、大阪日日新聞 元気大賞 2012「銀賞」、なにわ大賞「特別賞」
- 【2013年】日経WOMAN ウーマン・オブ・ザ・イヤー2013「若手リーダー部門」選出、共同通信社 第3回地域再生大賞（大阪府代表）「優秀賞」
- 【2014年】日経ソーシャルイニシアティブ大賞ファイナリスト選出、BEN&JERRY'S「集まれ！よよよい仲間たち」グランプリ受賞
- 【2015年】Google インパクトチャレンジ グランプリ受賞、日経ソーシャルイニシアティブ大賞新人賞 受賞

## ココロの学校 企画講演実施要項（案）

- 演 題 「約束」（仮題）
- 日 程 2016年8月29日（月）
- 場 所 大阪国際学園 奥田メモリアルホール
- 講 師 アルケミスト
- 時 程 13:20 開場（生徒：高1、2年、中3・移動、着席→13:25までに点呼完了）  
13:25 諸注意・校長挨拶  
13:30 講演「約束」  
（質疑応答）  
15:00 校長挨拶 終了 ⇒ 生徒移動  
※各クラス教室もしくは、会場にて感想文を記入

### 【講師プロフィール】

#### アルケミスト

夢をあきらめない気持ちが生んだ“歌の錬金術師たち”

客席から歌詞に入れる3つのキーワードをいただいて即興であつという間に作詞作曲し、実際に演奏・歌うコーナー。まさに歌を紡ぎ出す、離れ業的パフォーマンスは大人気です。現代の吟遊詩人。TV番組『誰も知らない泣ける歌』や『世界一のSHOWタイム』等でも感動を呼んだ、“即興のコーナー”は、アルケミストならではの“歌を紡ぎ出す離れ業的”パフォーマンスであり、アルケミストのライブの醍醐味です。

“井尻慶太”のピアノに合わせて、腕に障害を持つ“こんやしょうたろう”が歌う音楽の世界に感動。心が震える歌をご堪能下さい。

2001年、文化放送フリーステーション「アルケミストのそんなこんなでラジオしょう！」全6回放送。2002年、TVK「あっぱれKANAGAWA大行進！」レギュラー出演、2005年、2006年、2007年には、NHK教育テレビ「こどもにんぎょう劇場～タイムマシンの冒険」音楽担当など、ラジオ、テレビにも活躍の場を広げる。また、2002年冬、奇跡的にも小説「アルケミスト」の著者パウロ・コエーリョ氏に会う。その時、彼は二人に「どんなに離れていても、僕等是一緒だよ。君たちはもうすでにアルケミストなのだから。」と言葉を残した。

ライブで行う“即興のコーナー”（客席から歌詞に入れる三つのお題を出して貰い、即興で作詞作曲し、演奏・歌うコーナー）は、アルケミストならではの“歌を紡ぎ出す離れ業的”パフォーマンスであり、聴く者にとってはアルケミストのライブの醍醐味でもある。日本テレビ系列「誰も知らない泣ける歌」でも、即興で歌を作る離れ業を披露し絶賛され、再出演を果たす。現在もなお、アルケミストは“歌の錬金術”を求めて、旅をしている。

こんやしようたろう

ボーカル

1976年8月24日生まれ

出身：宮崎県



Photo by TOMOKO GOTO

高校のとき、僕は夢を諦めました。

僕には左手のひじから先がないし、才能もないし、夢に破れて泣くのがオチだと、一人で勝手に納得して、諦めていたんです。そう思うのはラクなことでした。とても。早くそのことに気がついてよかったとさえ思っていました。

でも、ある日ぼーっと夜食を食べつつ思ったんです。宇宙の大きな流れから見ると、僕はただのかけらなんだなって。夢に破れて泣こうが、もっと言えば、僕がいなくなっても宇宙が消えてなくなるわけではないんだろうなって。そう思ったら、ちょっとくやしかったけど、スーと胸のつかえが取れたようにラクになれました。

歌いたいなら歌えばいい！本当に、とても簡単なことでした。

そうか。僕は今、ここで、こうして生きている。もうそれだけで、失敗なんてありえないと思ったんです。僕が生きているということが、僕にとっては何よりすばらしい。それ以上の何があるのでしょうか。ある日。ぼーっと夜食を食べたあの日以来。

僕は僕のためにどう生きるか、考えるのはその事ばかりです。

井尻慶太

ピアノ

1976年8月12日生まれ

出身：神奈川県



Photo by TOMOKO GOTO

歌について考えるとき、いつでも胸に刻まれてあるのは、「詩は投壘通信のようなもの」というパウル・ツェランの言葉です。歌もまた、投壘通信のようなものだろうと思うのです。

どこかここではない場所になんて行き着くことのできない僕ら人間は、それでもなお、ここではないどこかが、どこかにあることを知っていて、そして、その身も蓋もないくらい確実にあるどこかに思いを馳せる術が、「投壘通信」であり、歌であるだろうと思うのです。どこに届くのかさえ判らないまま、どこかに届くという約束さえなく、これを拾うのかもしれない誰かの「心の岸辺」をめざしている。もし本当に届いた場所があったなら、そこそが予めの宛先だったのでしょ。

アルケミストの歌がその場所への途上の波間にあるとき、また同時に、相方のこんやしようたろうと僕との間にもきつと壘を運ぶ波のうねりがあって、……凧のときもあるかもしれない、思いもよらない方向へと流されることがあるかもしれない、……そんな波の姿をいつからか楽しんでる自分にも気づきはじめています。

歌を作るということ、それを演奏するということが僕にとっては投壘のその腕を振り上げる身振りに重なります。